

English Communication A におけるディベートの実践 どのように始め, どのように指導すべきか

Practice of Micro-debate in English Communication A How to Start and What to Instruct

佐藤 剛

Tsuyoshi Sato

弘前大学教育学部

Faculty of Education, Hirosaki University

Abstract

This report outlines the practice of micro-debate (Nakajima, 2009) conducted as an introduction to group debates in English Communication A, a Liberal Arts English Course of Hirosaki University. For this debate, the students in groups of three are required to make a presentation to persuade their group members to join one of three events (*National Day Parade; Tasty Food; Fireworks and Shows*) which are held on the National Holiday in the UAE. The results of this practice imply that introducing a micro-debate, which creates the necessity to communicate, facilitates students' attitude to carefully examine the explanatory passage of the textbook or to look up necessary expressions. On the other hand, one concern gleaned from this practice is that in judging the winner of the debate, students focused mainly on non-linguistic factors, such as volume of voice, size of gestures, and use of pictures. Based on these observations, this reports identifies the need for clear instructions which raise students' consciousness to focus on the content of presentations, such as organized arguments and logical development.

Keywords: ディベート, スピーキング指導, 教養教育

2022年から完全実施となった高等学校学習指導要領では, 以下のような目標が示され, 実際に英語を使ったコミュニケーションを通して, 外国語やその背景にある文化を, 社会や世界, 他者との関わりに着目して捉え, コミュニケーションを行う目的や場面, 状況等に応じて, 情報を整理しながら考えなどを形成し, 再構築する能力を育成することの重要性が強く示されている。

第1 目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ, 外国語による聞くこと, 読むこと, 話すこと, 書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して, 情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す (文部科学省, 2018, p. 12)。

この目標とされる資質・能力の育成のための指導の一例として挙げられているのが, ディベートであり, その実践を通して論理の構成や展開を工夫し・伝え合うことができるようになるための指導を行うこととされている。学習指導要領において, ディベートは以下のように定義されている。

ディベートとは、賛成又は反対の立場を明確にして、自分の立場の意見や考えにより妥当性や優位性があることを述べる活動であり、ペアで意見をやり取りしたり、グループでルールに従って議論したりするなど、様々な方法で行うことが可能である。やり取りの目的や話題、生徒の習熟の程度などに応じて、適切な方法や形式を設定する必要がある。また、生徒に賛否両方の立場を経験させることも可能であり、そうすることで、当該の話題について多様な観点から考察する力を育成することにもつながる（文部科学省, 2018, p. 88）。

ディベートが英語学習に与える効果が高いことは、先行実践や先行研究でも指摘されている。樫葉（2008）は、ディベートの実践を通して、学習者の意識は言語形式の正確さよりも、情報のやり取りに向くようになり、早くたくさん話すようになるとしている。坂口（2022）は、ディベートは、具体的な場面を想定した発信力育成のための重要な活動であるとし、学習者に、即興性、論理や根拠を明確にした論理性、他者視点に立った多角的な思考、説得性を育成することができる授業実践であるとしている。中嶋（2009）は、ディベートが育てる能力として、①問題意識を持つようになり物事に対して深く考えるようになること、②自分の意見を持つようになること、③情報を選択し、整理する能力が身につくこと、④論理的に考えるようになること、⑤相手の立場になって考えることができるようになること、⑥広くものを考え、見るようになること、⑦他者の発言を注意深く聞くようになること、⑧話す能力が向上すること、⑨相手の発言にすばやく対応する能力が身につくこと、⑩協調性を養うことができることの9点を挙げている。

このような効果が期待される一方で、坂口（2022）は、高等学校普通科に在籍する高校2年生183名を対象に、ディベートの経験に関する調査を行い、高校入学前に日本語でディベートの経験をしたことがある高校生はおよそ70%であったのに対し、英語でディベートを経験したことがある高校生は約13%であり、大多数の高校生が高校入学前に英語でのディベートの経験がなかったと報告している。その上で、英語でのディベートを実施する上で障害となっている要因として、「ディベートへの抵抗感」、「経験不足による不安」、「思考への不安」、「論題への不安」、「英語力への不安」と「即興性への不安」があると指摘している。

ディベートの導入が困難であることは、大学生を対象にした調査・研究でも指摘されている。須部（2014）は大学生の論理的思考の低下を問題視し、それは自然と身につけていくものではなくディベートをはじめとした一定の教育上の労力や時間をかけることで初めて育まれるものであるが、その実践例が多くないことを指摘している。また、村越（2009）も日本人のディベート能力が諸外国と比較して低いことを挙げ、その原因として日本人大学生が「人前で話しをしたがらないこと」、「勝敗を争って、相手を批判したがらないこと」、「もともと誰かに向けて自分の意見などをはっきり主張したがらないこと」、「人前に立つなど目立つことをしたがらないこと」を挙げている。ディベートをするためには英語運用能力だけでなく、情報の取捨選択や、論理展開など多くの能力が必要なり、授業で導入することに不安を感じる場合が高等学校においてだけではなく大学においても少なくないと考えられる。そこで、本稿では、教養教育英語科目 English Communication Aにおいて、グループに分かれてのディベートの導入として中嶋（2009）が提案するマイクロ・ディベートの実践の経過およびその成果と課題を報告するものである。

授業実践

対象学生

本稿で報告する実践の対象学生は、教養教育英語科目 English Communication A（週1回、90分授業）の受講する大学1年生、25名であり、学部は農学生命科学部、人文社会科学部、医学部保健学科、教育

学部、理工学部である。初回のガイダンスの時間を除き、実質15回の授業を実施した。分析に当たっては、マイクロ・ディベートを実施した授業に出席した学生23名の音声データを使用した。

使用教材

使用した教科書は、*UNLOCK 2* (Dimond-Bayir et al., 2019) である。この教科書は、1つのユニットが、*Watch and Listen*, *Listening 1*, *Language Development*, *Listening 2*, *Critical Thinking*, *Preparation for Speaking*, *Speaking Task*, *Objective Review* で構成されている。通常の授業においては、1時間目に主にそのユニットに関するビデオを見たり、リスニングタスクを行うなどインプットを中心とした *Watch and Listen* と *Listening 1* を扱い、2時間目にその後のアウトプット活動において必要になる語彙や文法を明示的に指導し練習を行う *Language Development* とより詳細な情報に関するリスニングタスクである *Listening 2* を、そして、1時間目と2時間目の学習内容を踏まえたアウトプット活動中心とした *Critical Thinking*, *Preparation for Speaking*, *Speaking Task*, *Objective Review* を3時間目に扱うというように1ユニットを3時間扱いで構成した。

本実践の対象となるユニットは *Unit 2 Festivals and Celebrations* である。1時間目と2時間目に、世界のお祭りや文化的な行事についてのビデオやリスニング教材の内容理解や、それについてペアやグループでのディスカッションを通してノートテイキングや視覚情報から内容を予測するストラテジーなどを扱った後、ユニット全体の最終課題となる3時間目のアウトプット活動では、「Choose an event from a festival and persuade your group to go to it」というテーマで、説得力のある議論の構築や賛成と反対の立場の表明をしながら *United Arab Emirates* の *National Day* に行われる4つのイベントのうちの1つに行くよう説得するマイクロ・ディベートを実施した。

指導の流れ

上記の通り、本実践の対象ユニットは *Unit 2 Festivals and Celebrations* である。1時間目に学生はお祭りに関する写真を基にペアでディスカッションをする活動、中国のハルビンで行われる *Ice Festival* に関するビデオの視聴、お祭りや文化的な行事に関する語彙や表現の学習、最後に *The Festival of Idea*, *Cherry Blossom Festival*, *The Muscat Festival* という3つのお祭りに関する詳細を聞き取るリスニング活動とディスカッションを行った。2時間目には、現在形と現在進行形の使い方や用法の違いや、*go*, *take*, *have* など高頻度語である動詞のコロケーションの学習など言語形式にフォーカスした活動を実施し、最後にアメリカとカナダの *Thanksgiving Day* の違いに関する会話を聞いて要点を捉えるリスニング活動とそれに関するディスカッションを行った。1時間目と2時間目の活動の流れは以下の表1に示すとおりである。

それを受けて、ユニット末には *Speaking* として *UAE* の *National Holiday* に行われる、*National Day Parade*, *Tasty food*, *Fireworks*, *Shows* の4つのイベントの1つについてグループメンバーに紹介し、そこに一緒に行くよう説得するという活動が設けられている。教科書では、ディベートという扱いではなく、自分で選んだイベントについてグループで紹介し合うというディスカッションの活動が設定されているが、この活動をディベートとして実施することで、中嶋(2009)がディベートを行うことのメリットのひとつとして挙げている「意見を拮抗させ対立させて、談話の質を高める」(p. 26) とあるように、より学生の発話の内容を高めることができると考えた。

そこで3時間目では、授業の最終目標として、*UAE* の *National Holiday* に行われる、*National Day Parade*, *Tasty food*, *Fireworks*, *Shows* の4つのイベントのどれに参加すべきかについてディベートを行うことを学生に伝えた。ディベートであるので、自分が参加したいものについてではなく、どのイベントについて説明するかは、ディベート開始直前に発表することとした。その上で、1つ目の活動として、テキスト内で示されているそれぞれのイベントに関して説明する英文を読解する活動を行った。

ディベートという勝ち負けの要素が加わった活動に変化させたことで、それぞれがどのようなイベントであるのかの理解が説得力のあるプレゼンテーションにつながるため、学生に読むことの必然性を強く持たせることにつながると考えられる。また、教科書の活動では、National Day Parade, Tasty food, Fireworks, Showsの4つの中から学生自身が参加したいイベントを選び、それについてプレゼンテーションを行い、グループでディスカッションをするということになっている。この活動は学習者が実際に参加したいと考えているイベントについて話すことができるというメリットがある一方、選択しなかったイベントについてのインプットやアウトプットが多く確保できないというデメリットがあることもまた事実である。本実践では、自分の意見とは関係なくディベートの直前に立場が決められる形態をとることで、学生は4つのイベントのいずれについても説明できなくていけない状況であるので、4つすべてのイベントについて十分に理解が求められる。

表1

Unit 2 Festivals and Celebrations の指導の流れ

時間	指導内容
1時間目	<ul style="list-style-type: none"> ・ 扉絵を見て、その絵に関してのディスカッション ・ ハルビンのIce Festivalに関するビデオの内容理解 ・ 語彙や表現の導入と学習 ・ The Festival of Idea, Cherry Blossom Festival, The Muscat Festivalという3つのお祭りに関して詳細を聞き取るリスニング活動とディスカッション
2時間目	<ul style="list-style-type: none"> ・ 現在形と現在進行形の使い方や用法の違い ・ go, take, have など高頻度語である動詞のコロケーションの学習 ・ アメリカとカナダのThanksgiving Dayの違いに関する会話の要点を捉えるリスニング活動とディスカッション

次に、使用した教科書では説得力のある議論のためには、論拠の提示順序が重要であるとし、さほど重要ではないものや聞き手が興味を示さないと考えられるものから提示し、最後に最も重要なポイントや聞き手にとってアピールとなるものを提示することが有効であるというスキルを紹介している。教科書を使用して説明をした後、檜葉（2008）で紹介されている「ペットにするのであればネコよりイヌの方がよい」（p. 106）という立場でディベートをする場合を例に実際に議論を組み立てる練習をクラス練習で実施した。まずは、どのような根拠が考えられるのかを学生に挙げさせた。その結果、学生から以下のような論拠が出された。

- ①イヌはネコよりもかわいい
- ②犬はいろいろな芸を学習することができる
- ③犬は散歩が必要なので、運動不足の解消になる
- ④番犬としての役割を果たすので防犯になる

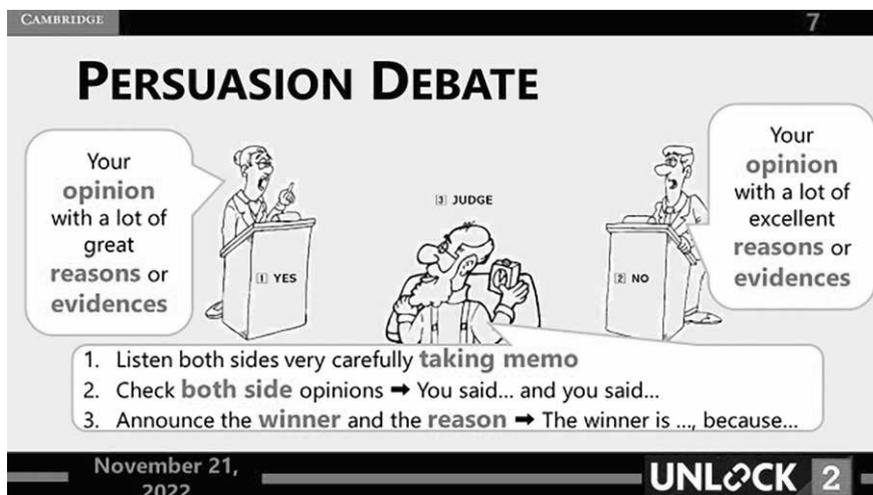
学生には①は主観的な意見であり、ネコがイヌよりペットとしてよりよいという立場の人は、ネコの方がむしろかわいいという意見になり、ディベートの根拠としては不適切であるという指導を行った。その上で、②から④の論拠をどのような順序で提示すればより説得力のある議論になるのかをペアで話し合わせ、その結果を全体で共有した。学生からは、教育学部の学生であれば誰かに何かを教えることが好きである可能性が高いので②の「犬はいろいろな芸を学習することができる」が最も重要である可能性が高いであろうし、普段から自己の健康管理に気を付けている人であれば③の「犬は散歩が必要なので、運動不足の解消になる」が、そして一人暮らしを始めたばかりで、夜一人で過ごすことが怖いと感じている人にとっては④の「番犬としての役割を果たすので防犯になる」が最も重要となるよう

に、何が最も重要であるのか、言い換えれば議論の最後に提示する論拠は、誰にとっても共通するユニバーサルなものではなく、聞き手がどのような相手であるのかによって異なるという意見が出された。

その上で、中嶋（2009）が提案する方法でマイクロ・ディベートを実施した。マイクロ・ディベートとは3人グループで行う最小サイズのディベートの形態であり、そのメリットは3人全員が肯定、否定、審判の立場を経験できることである。また、グループでディベートを実施した際には、英語が得意な学生がたくさん話し、苦手な学生は一言も話さずディベートが終わってしまうというように、英語の熟達度によって発話量に差がでることがあるが、マイクロ・ディベートの形態をとることによりこの問題点を解決することができる。まずは、3人のグループを作り、図1に提示するスライドをパワーポイントで示しながら、マイクロ・ディベートにおける3つの役割について説明し、これからローテーションですべての役割を行うことを説明する。当日、授業に参加した学生は23名であり2つのグループが4人のグループとなった。その場合は審判を2人で行うよう指示した。

図1

マイクロ・ディベートの役割とローテーションの説明に使用したスライド



次に、グループ内でじゃんけんをさせ、勝った順に①、②、③（4人グループの場合は④）と番号を与えた。その後、その番号に応じて以下のように役割とトピックとを指定して、ローテーションしながら、マイクロ・ディベートを行った。

表2

マイクロ・ディベートの役割とトピック

回数	学生①	学生②	学生③
ディベート1	National Day Paradeに参加すべきである	Tasty Foodに参加すべきである	審判
ディベート2	審判	Fireworksに参加すべきである	Showsに参加すべきである
ディベート3	Tasty Foodに参加すべきである	審判	Fireworksに参加すべきである

役割とトピックを発表後のそれぞれのマイクロ・ディベートの流れは、発表者は5分間で話す内容の準備を行う、その後3分ずつでプレゼンテーションを行い、2人のプレゼンテーション終了後に、審判が両者の意見を確認し、根拠とともに勝者をアナウンスするという形をとった。まず、2人のプレゼン

テーターに対しては5分間の準備時間の際、スマートフォンやコンピュータの使用を認め、教科書に書かれていない内容であっても、英語で説明できるものであれば、プレゼンテーションに活用してもよいこととした。また、英語の単語や表現などを調べることも許可したが、そのようにして調べた単語や表現は、自分にとってはもちろん、聞き手にとっても難しいものである可能性があり、そのままプレゼンテーションで使用しても理解してもらえない場合があることを説明し、例示をしたり、パラフレーズをするなど工夫をするよう指導した。その上で、審判のことをよく観察し、どの順序で論点を提示すればよいのか吟味するよう指導を行った。次に、審判の学生については、図1に示す通りプレゼンターの発表内容についてノートを取り、勝者をアナウンスする前に、それぞれの論拠について確認するように指導した。プレゼンターはそれについて、自分の発言内容と異なる場合は反論したり修正を求めるように指示した。最後に、勝者をアナウンスすることとし、その際に2人のプレゼンターが納得するような論理的な根拠を述べるということが重要であるという指導を行った。1つのマイクロ・ディベートに要した時間は15分程度であり、それを3回実施したため45分間の活動である。

考 察

本実践を通して対象学生がどのようなパフォーマンスをしたのかを評価するために、授業の課題として、審判役の際に話した内容を録音し、その音声ファイルをTeamsにアップする形で提出することを課した。課題を割り振る際に学生に与えた指示文は以下の通りである。

審判役の際に話した内容を録音してTeamsにアップする形で提出してください。

評価規準

- ①両プレゼンターが話した内容を説明していること
- ②どちらを勝者として選んだかについて、論理的な理由をもって説明していること

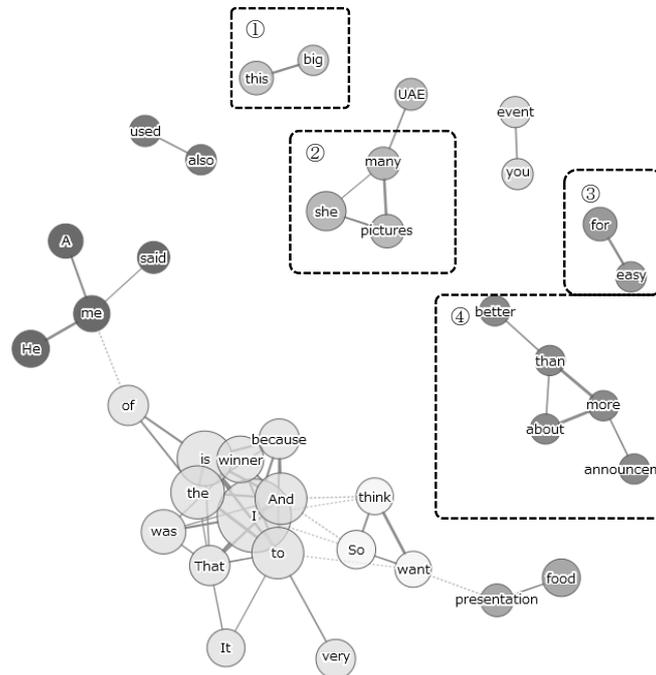
上記の通り、審判役は判定をアナウンスする前に、両プレゼンターの内容を確認することになっているため、審判役の音声を聞くことにより、プレゼンターが話した内容も間接的にモニターできると考えた。

学生が提出した音声を評価した際に、1つ目の評価規準「両プレゼンターが話した内容を説明していること」についてはすべての学生が、文法的な間違いは多少みられるものの十分に意味内容が伝わる内容のものを提出していた。一方で、2つ目の評価規準である「どちらを勝者として選んだかについて、論理的な理由をもって説明していること」については、これを十分に満たす内容の音声データを提出した学生はほとんど見られなかった。特に勝者を選ぶ際の理由について、論理的なものを挙げることに困難を感じている様子が多く観察された。

それでは、学生は勝者を判定するにあたりどのような発言をしているのであろうか。この点を検討するために学生が提出した音声ファイルから、勝者のアナウンスとその理由を述べている箇所の書き起こしを行い、テキストマイニングの共起ネットワーク図を使って、学生の発言の傾向を分析した。使用したコンピュータソフトウェアは、KH Coder 3（樋口、2020）である。分析対象となるデータは、異なり語数218語、総語数が1,734語である。その結果、以下の図2に示す共起ネットワーク図を得た。

図2

審判役の学生の勝者の理由を示す発言内容の共起ネットワーク図



上の図2から以下のことが観察される。まずbigとthisで構成される①のネットワークであるが、コンコーダンスラインを確認したところ、big gestures to explain this eventやthis event with big voiceのような形で用いられており、学生たちは勝者の理由のひとつとして、ジェスチャーや声の大きさを挙げている。次に、②のネットワークはmany picturesで構成されることから、UAEのイベントや料理などについて説明する際にインターネットの画像検索を使用して、関連する画像を示しながら説明したプレゼンターを勝者としている。③はeasy for meという発言内容に基づくネットワークであり、より簡単な表現を使ったプレゼンターを勝者としてアナウンスしている。また、コンコーダンスラインを参照したところ、このネットワークにはeasy to understand for meのように自分にとって分かりやすいプレゼンテーションをより優れていると判断している場合があることも観察された。この理由は妥当なもののように一見思えるが、どのようなことが分かりやすさにつながっているのかについて該当する音声ファイルを詳しく分析したところ、上記にあげたジェスチャーや声の大きさ、写真の使用に帰するものばかりであった。最後に、better, more, than, about, announcementからなるネットワークは、his presentation is better than her because he said more reasonsのように、理由を数多く上げたほうをよりよいプレゼンテーションであると判断する発言によるものであることが観察された。学生は、論理性のような発言内容ではなく、ジェスチャーや声の大きさ、視覚的補助のような言語外の要因または、あげた理由の数に基づいて、ディベートの判定を行っていることを示す結果となった。教科書を使用して事前に指導を行った、論拠を示す順番に言及した学生がひとりもいなかったことも同じく課題として挙げておきたい。中嶋(2009)も、実際には無視されがちではあるが、ジャッジを育てることがディベートの指導では重要であると指摘し、ディベートを授業で実施する際にうまくいかない要因の主要な要因のひとつがジャッジの指導が十分にされていないことが挙げられるとしている。ジャッジが客観的で論理的な判定をすることが、プレゼンターの発言の質を高めることにつながるとしている。本実践のように、ジャッジが大きな声とジェスチャーで、イラストを用いた方を勝者とするのであれば、学生たちの意識が英語の質や展開などに向くとは考えにくい。むしろ、英語の発言内容はさほど気にせず、どのようなジェスチャーを使うか、どの写真を使うかということに意識が向いてしまう可能性が高い。このような状

況から、論理的な判定をする審判をどのように育て、その判定による波及効果からプレゼンターにより発言内容にフォーカスさせるためにはどのような指導を普段から継続することが必要なのかが今後の課題である。

まとめ

本実践は、教養教育英語科目 English Communication A の授業においてグループで実践するディベートの導入として実践したマイクロ・ディベート（中嶋，2009）について紹介し、その成果と課題を考察するものである。UAE の National Holiday に行われる、National Day Parade, Tasty food, Fireworks, Shows の4つのイベントについて自分か選んだもの、好きなものについて紹介したり、意見交換するディスカッションではなく、ディベートという立場を自分では選べない、自分の意見とは異なる立場で発言する可能性もあり、さらに勝ち負けがつく活動として設定したことで、学生たちは自分が選んだものや好きなイベントに限らず、他のイベントについても内容を理解する必然性が生まれ、説明文を入念に読んだり、必要となる表現を調べる姿勢が観察された。一方、課題として提出を課した、審判役の音声データから、審判としてどちらの発言がすぐれているかを判定する際に、学生たちは、声やジェスチャーの大きさ、写真の使用などにフォーカスしていることが観察された。効果的なプレゼンテーションにおいては、これらのような言語外の要因も重要であることを否定するものではないが、英語の授業である以上、審判もプレゼンターも、論拠や論理展開など発言内容にフォーカスさせる必要がある。この課題の克服のため、指導の工夫を重ねていきたい。

謝 辞

本研究は、弘前大学教養教育英語 English Communication A を受講した25名の学生の協力を得て実施することができました。ここに感謝の意を示します。

引用文献

- Dimond-Bayir, S., Russell, K., & Sowton, K. (2019). *Unlock: Listening, Speaking & Critical Thinking Student's Book, Level 2 (2nd Edition)*. Cambridge University Press.
- 檜葉みつ子. (2008). 『英語で伝え合う力を鍛える！1分間チャット&スピーチ・ミニディベート28』 明治図書
- 坂口寛子. (2022). 「「論理・表現」における英語ディベート指導に関する考察－ディベートに関する調査結果に焦点をあてて－」 『LET Kyushu-Okinawa BULLETIN』, 22, 27–36. https://doi.org/10.24716/letko.22.0_27
- 須部宗生. (2014). 「「ビブリオバトル」と「ディベート」を活用した大学生のコミュニケーション力・論理的思考力の育成の試み」 『環境と経営：静岡産業大学論集』, 20 (1), 87–101.
- 中嶋洋一. (2009). 『生徒が熱狂・教室が騒然 英語のディベート授業・30の技』 明治図書
- 樋口耕一. (2020). 『社会調査のための計量テキスト分析 —内容分析の継承と発展を目指して— 第2版』 ナカニシヤ出版
- 村越行雄. (2009). 「大学生の日本語ディベート能力の開発」 『コミュニケーション文化』, 3, 17–31.
- 文部科学省. (2018). 『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 外国語 英語編』, https://www.mext.go.jp/content/1407073_09_1_2.pdf